

線状降水帯予測精度向上ワーキンググループ第 6 回会合 議事概要

1. 開催日時

令和 5 年 6 月 7 日（水）13 時 15 分～15 時 15 分

2. 開催場所

気象庁 3 階講堂

※オンライン会議併用

3. 出席者

別紙 1 のとおり

4. 議題及び検討結果の概要

下記の議題について検討を行った。

○線状降水帯の予測精度向上に向けた取組の進捗状況について

- 多くの観測データを利用することで数値予報モデルの予測精度が改善したことは、評価できる。また、「顕著な大雨に関する気象情報」について、雨量予測を用いて最大 30 分程度前倒して発表を開始したことは非常に大きなステップである。
- 線状降水帯に関する情報については、今後、半日前や 2～3 時間前からの予測、実況を伝える情報など確実性やリードタイムの異なる情報を発表することになるが、受け手側が混乱しないよう、できるだけ分かりやすく、誤解の無いように伝えることが重要である。情報の改善の際は専門家にも相談するのが望ましい。
- 線状降水帯予測にあたり、海面水温摂動の導入をはじめとするアンサンブル予報の精度向上に向けた取組についても検討すると良い。

○線状降水帯の予測精度向上に向けた学官連携の方策について

- 集中的な観測の実施や定常的な観測の整備が進んでいることは、今後の機構解明研究の進展や予測精度の向上につながることで評価できる。機構解明研究の次のフェーズとして、半日前予測等の情報改善の目標に向けて、機構解明研究の成果を数値予報技術の高度化につなげていくために、学官連携でどのような取組を進めるべきかの議論を本格化させていく必要がある。

- 線状降水帯予測に対する目標達成のため、現業数値予報モデルの予測精度の現状・課題・目標などを積極的に共有して学官で議論することが重要である。
- 様々な学官連携手段の一つであるモデル貸与については、数値予報モデルユーザーからのフィードバックは限られたものであることに留意したうえで、学官で共通の現業数値予報モデルを利用することで機構解明研究を含む研究のよりいっそうの推進につながる可能性も考慮しつつ、効果的に成果を得るための方向性を検討すべきである。

以上

線状降水帯予測精度向上ワーキンググループ第6回会合 出席者

線状降水帯予測精度向上ワーキンググループ 委員（外部有識者）

- | | | | |
|------|------------|------------------------|-------|
| ○ 佐藤 | まさき
正樹 | 東京大学大気海洋研究所海洋地球システム研究系 | 教授 |
| | いとう
伊藤 | 京都大学防災研究所気象・水象災害研究部門 | 准教授 |
| | いとう
伊藤 | 東北大学理学研究科地球物理学専攻 | 准教授 |
| | かわむら
川村 | 九州大学理学研究院地球惑星科学部門 | 教授 |
| | しみず
清水 | 防災科学技術研究所 | 主任研究員 |
| | たかやぶ
高数 | 東京大学大気海洋研究所気候システム研究系 | 教授 |
| | たけみ
竹見 | 京都大学防災研究所気象・水象災害研究部門 | 教授 |
| | つぼき
坪木 | 名古屋大学宇宙地球環境研究所 | 教授 |

(○：主査、敬称略、主査以外は五十音順)

気象庁出席者

- | | | |
|------|----------------|--------------|
| やすだ | たまき
安田 珠幾 | 総務部参事官（技術） |
| いしだ | じゅんいち
石田 純一 | 情報基盤部数値予報課長 |
| はまだ | おさむ
濱田 修 | 情報基盤部気象衛星課長 |
| すぎもと | さとし
杉本 悟史 | 大気海洋部予報課長 |
| なかがわ | ひろし
中三川 浩 | 大気海洋部気候情報課長 |
| えいと | ひさき
永戸 久喜 | 気象研究所研究連携戦略官 |